

---

# となりの場所と交わる時

西野了

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

となりの場所と交わるとき

### 【コード】

N8951Y

### 【作者名】

西野了

### 【あらすじ】

短編小説の連載です。

## タクシードライバーのボヘミアン・ラブソング

気がつくといタリアン・レストランの店内にいた。白いテーブルの前に座っている。ちょうど茹で上がったパスタがテーブルに置かれたところだ。しかしその瞬間、店内は暗闇に包まれた。店内に流れていたバロック音楽も聴こえなくなった。

「火事だ！」

どこからともなく、その声は聞こえた。

私は慌てて出口を捜す。だが闇に包まれた空間は迷路のようで、自分が今どこにいて、出口がどこにあるのかまったくわからない。暗闇の中いくつもの黒い影がうろつくと彷徨っている。

しかし、火事だと聞こえたが火の手はいっこうに確認できないし煙の嫌な匂いもない。あるのはただ暗闇だけだ。その暗闇もまったくの暗闇ではなく、どこからか明かりが漏れているようで人が動く姿が確認できる。

私は壁伝いに歩いていると突然駐輪場に出た。スラックスのポケットには自転車のキーと自動車のキーが入っている。私の家からこのレストランまでは相当な距離だ。自転車で来るのならば2時間以上かかってしまう。しかし目の前には確かに私の自転車がある。3年前健康のためにと妻がプレゼントしてくれた、緑色の車体だ。休日には妻とときどきサイクリングにでかけたりするのだ。けれども今の私は疲れていた。体が泥のように重い。

私は自転車を利用することを諦めて駐車場に向かった。そこには私の愛車トヨタセリカが待っているはずだ。しかしその前を黒いスーツを着た背の高い男が立ちはだかった。髪の毛は短く、サンングラスをかけているがその視線の鋭さは隠しようがない。鼻は異様に高く唇は薄い。（私はこの男を知っている！）私は本能的に体を強張らせた。

「あなた、疲れているようだから、私のタクシーでお帰りなさい」

男は有無を言わせぬ口調で私を国道に停めてある黒いリムジンまで引き連れていった。

予想したよりも車内は狭い印象だった。しかし目の前にはウイスキーのビンと氷が入った安物のグラスがあった。ウイスキーはサントリーレッドだった。

「家に帰るには1時間以上かかるので、音楽でもかけましょう」と運転席の男は言うときピーカーからクイーンが流れてきた。私はこんな雰囲気の中、フレディ・マーキュリーのボーカルを聴きたくなかった。ブライアン・メイの電子的なギターも聴きたくなかった。この状況では無理な注文だが、チャット・ペーカールのトランプツトが聞きたかった。いや50歩譲って彼のボーカルでもよかった。もちろん、そんなことは言うことができなかった。

リムジンは音もなく夜の街を滑るように走っていく。私は落ち着かなく窓から外の景色を眺める。いつもの通勤途中に見る景色だ。

「ご安心を、あなたが帰るべきところまで、ちゃんと送り届けてさしあげますよ」

男は抑揚のない声で言った。

「私はちゃん礼節をわきまえている人間ですからねえ」

男は薄笑いを浮かべて楽しそうに言った。

私はその瞬間、この男とどこで会ったのか思い出した。5年前妻と旅行をしたときに空港でひろったタクシーの運転手だ。私の人生の中でこれほど粗暴で無神経で悪意を感じる運転はなかった。家に着いたとき妻をぐったりとして吐き気さえもようしていた。

私は怒りに震え「君の会社を訴えてやる！」と叫んだが、男は薄ら笑いを浮かべ「旅行の最後にいいスリルだった。チップもなしだよ、ケツ！」と捨て台詞を吐いて去っていった。

「君はあのとときの、ドライバー？」

「あなたのおかげで、私は職を失いましたからねえ」男はなぜか楽しそうに答えた。嘘だ！

私はあのととき妻の介抱で、男のことなどどうでもよかったし、実際

に苦情なども男のタクシー会社に言っていない。

「私はタクシードライバーが天職でした」男はタバコを取り出し火をつけ、深々と煙を吸い込んだ。

「天職を失うと人間、哀れなもんです」男の吐き出したタバコの煙がなぜか私の座席まで流れてきた。

クイーンが「ボヘミアン・ラプソディ」を演奏し始めた。

「そろそろ時間のようすな」男はハンドルを大きく右に切った。突然あたりは暗闇に包まれた。今度の暗闇は100パーセントの闇だった。リムジンのハイビームも一瞬で暗黒に吸い込まれている。間違いない。この男は断崖絶壁をめぐけて私としのタイプを敢行しようとしているのだ。見かけよりも手抜きのリムジンを使って。

いつしか山道に入りリムジンの上下動が激しくなった。エンジンの回転音も上がっていく。男はよだれを垂らしながら「どうです。最高のスリルでしょう？　今回はチップいりませんよ。あははははーっ」と狂ったように叫んでいる。崖の先まではあと僅かだ。

「……あなた」小さく僕を呼ぶ声が聞こえた。

死へのダイブまであと5メートル。

「あなた！　あなた！」

「パパ！」

黒いリムジンが宙を舞った。体が浮遊する感覚がした。

「あなた！」

「パパ！」

目を開けると、白い蛍光灯の光がやけに眩しかった。僕の目には涙を浮かべた妻と安堵した娘の顔、それに微笑んでいる若い女性看護師の姿があった。

「意識が回復したので、とりあえずひと安心ですな」

僕の枕元に立っていた眼鏡をかけた医師が妻と娘にそう告げた。

## お好み焼き屋の憂鬱

「てめえ、ぶつとばすぞ！」  
「だって」

そう言い終らないうちに、黒い制服を着た中学生が吹っ飛ばされた。彼の座っていた椅子も「ガターン！」という激しい音とともにひっくり返った。

「ムカつく！」

カミソリのような目つきの男の子が「ダン！ ダン！ ダン！」と足音を故意に響かせ、そのお好み焼き屋から出て行った。

「痛いっ」

頬を押さえながら吹っ飛ばされた中学生が起き上がった。

「だから村井に逆らったらダメって言ったじゃん」

同じ制服を着た小柄な男の子がお好み焼きをパクつきながら、平然と言った。

「あいつ先月もサッカーの試合で木村っちの鼻の骨を折っただろ」  
隣に座っている長身でやせぎすの少年は少し嬉しそうに話題に加わった。

「あーっ、いつててて。顔の骨は折れてないみたい。村井のバカ、俺が『だけどっ』て言っただけで切れやがって」

殴られた中学生はブツブツ言いながらも、再びお好み焼きを食べ始めた。

10分後、彼らはレジに向かい支払いをすませた。

「あら、あなたたち、1人分足りないわよ」  
バイトのタミちゃんが不機嫌そうに言った。

「えーっ」

「何だよ」

「あーっ、村井の分だよ。あのバカ、金払わないで帰っちゃったんだよ」

3人は殴って先に帰った男の子を「ボケ」だとか「ビンボー人」だとか「セコツ」とか言っていたが、誰も彼の分を支払おうとしなかった。

「あなたたち、友だちでしょ。1人200円ずつ出したらいいでしよう」

タミちゃんはかなりイライラしている。

「俺、あいつと友だちじゃないもん」

「俺も」

「わたしも」

やせた男子が女の子のような仕草をし裏声で言った。ほかの二人はギヤハハハーツと笑った。タミちゃんの右目の上の皮膚が怒りでピクピクと引きつっている。慌てて美人のママさんが彼らに優しく言った。

「あなたたち、ここはともかく彼の分を支払って、あとから彼にお金をもらったら?」

「ちえ!」

「誰だよ、あのバカ誘ったの」

「村井が勝手について来たんだよ」

彼らはまたも文句を言いながらも先に帰ってしまった男子分の支払いをすませて出て行った。

「もーっ」タミちゃんは深いため息をついた。

「今の中学生は、あんなもんよ」ママさんの言葉に「そうですね」とタミちゃんは不思議そうに答えた。

「アハハハーツ! あんたそれでどーしたん?」

鉄板を囲んだテーブルから女の大声が響いた。茶髪の女が携帯電話でビールを飲みながら大声で話している。隣に座っている夫は「スラムダンク」を熱心に読みながらイカ玉のお好み焼きを頬張っている。そのお好み焼きは甘口ソースがドロリと乗ってさらにマヨネーズも層をなしている。お好み焼きに乗り切れなくて鉄板に溢れ落ちたソースやマヨネーズが、ジュージューと音を立てて焦げている。

二人の向かい側には女の子がケータイでメールを打ち、男の子がケータイでゲームをしている。

ママさんはその様子を見て眉をひそめた。以前その女性にやんわりと言ったことがある。

「ソースやマヨネーズをたくさんかけなくても、美味しいですよ」

「ああ、そう」

だがその家族が来るとマヨネーズ一本が必ず空になるのだ。

「エビ玉ありがとうございました」

タミちゃんの元気な声がカウンターから聞こえた。

常連客のジョンがカウンターの奥の席に座っている。地味だが品のよいトレーナーを着ている彼はあまり喋らない。

ジョンは目の前のエビ玉に辛口ソースを薄っすらと塗った。それから青海苔と鰹節を少しだけ散りばめた。そして丁寧にお好み焼きを切り分け食べ始めた。ときどき日本茶を美味しくそうにする。タミちゃんはジョンからこんな話を聞いたことがある。

「ロサンゼルス・ドジャーズのトリー監督は癌を患った後から、日本茶を愛飲している。僕も日本茶が大好きです。身体がきれいになる感じがする」

ジョンの前にいるとママさんはようやくほっと一息つくことができた。タミちゃんも嬉しそうにジョンの湯のみにお茶を入れなおした。

「ここのお好み焼きはオイシーです」

ジョンが伏し目がちにそう言うと、タミちゃんとママさんは顔を見合わせ小さく笑った。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8951y/>

---

となりの場所と交わるとき

2011年11月27日10時49分発行